

## 「九州人類学研究会」誕生の前後

波平, 恵美子  
お茶の水女子大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2338947>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 30, pp.6-9, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

## 「九州人類学研究会」誕生の前後

波平恵美子  
(お茶の水女子大学)

「九州人類学研究会」誕生のいきさつを述べるには、私個人の、教育学部へ学部進学した時期からの体験をからめて行うことが私にとっては容易なので、そのようなかたちで記してみたい。

昭和37年(1962年)10月に待ち望んでい

た学部進学となり六本松の教養部から箱崎の「本学」へ通うことになった。当時、学部の授業もゼミも、学年の枠を超えて単位登録をすることができ、教育学系、心理学系の様ざまな授業に出席し先輩達の熱心な勉学の態度に強い印象を受けた。当時吉田

禎吾、綾部恒雄両先生は在外での教育・研究に携わっておられたため、文化人類学の授業のゼミも開かれていなかったが、1年たった昭和38年に相ついで帰国され、それを機に文化人類学の授業やゼミそして先輩の江渕一公、松永和人、上田将、田中聖子、丸山孝一氏達に接することになった。上田富士子氏とは学年が一年しか違わないこともあり、教育学の多くの授業で御一緒だったのでそれまでに接することが多かった。先輩達も両先生も、教育学専門の方々とは随分異なる雰囲気を持っておられたのに驚いたし、何よりも両先生が、院生も学部生も同じように接してくださり、学部生でも希望すれば院生と共に研究会に出席することも許されていた。

こうした上下の差別のない扱いは、当時、学部学科の枠を越えて組織されていた研究会へ出席することにまで及んでいた。経済学、法学、宗教学、社会学、人類学、文化人類学の先生方がほぼ月に一回の割で研究会を開いており、それを通して古野清人先生、青山道夫先生、内藤莞爾先生などの大先生方のお顔を拝見することができたこと、また、著書だけでなくそのお人柄にも接することができたことは、今になって考えると誠に幸運だったと思う。古野・青山先生のお弟子さんや後任者であった有地亨先生や野村暢清先生の活潑な議論を、ほとんど口を開けて呆然と伺うだけであったが、そこで交される専門用語の意味を知ろうと、研究会に出席した後の数日間に懸命に事典や新書で勉強した。この研究会は当時の人文・社会科学界で大きな役割を果たした九学会連合の、九州大学における研究会支部のようなものであるのに気付いたのは、博士課程入学後である。何よりも自由な雰囲気と、先生方のそれぞれの学問分野を背負っているという気概に接したこと、そして「専門分野」のアイデンティティをしっ

かり持ちまたそれを互いに示しながらも、他領域の方法論やテーマに対して常に興味と関心を抱き、時間を忘れて議論する姿に憧憬の念を持つようになった。

昭和40年(1965年)に大学院修士課程に入学する時、指導教官の吉田禎吾先生に「文化人類学を専攻しても100.0パーセント就職はない。だから教育学もしっかり勉強するなら進学しても良い」と言われて入った大学院生活は、もっと刺激的で楽しく、同時に進学した6人の教育学研究科の同級生と、それぞれの専門の話定期的に会って交す時も、文化人類学の面白さや可能性に一層気づかされることが多かった。

吉田先生の指導を受けるためにスタンフォード大学からPh. D.キャンディデイトの張さんに続いてトム・ロリンさんが研究室に入ってきて、アメリカの大学で行われているらしい、フィールド・ワークの資料のデータ整理の方法を、調査地で直接見ることができたのも幸いであった。

振り返ってみると、今の、私が在職しているお茶の水女子大学の大学院生の研究・教育環境に比べると、当時の方がはるかに恵まれていたことは確かである。

昭和43年(1968年)8月に、結婚と同時にテキサス大学に留学渡米し、3年後の46年10月に九州大学に復学した時、余りにも全てのことが激変していて、その状況を把握し、さらに適応するのに1年以上を要した。3年間に学園紛争の嵐が九州大学にも吹き荒れて、教育学部に入っていた建物も占拠され、文化人類学の研究室となっていた部屋にも学生が寝起きしていたために、そこに収められていた調査票や写真やそのネガが失われていた。そのことも私にはショックだったが、何よりも、あれほど家庭的であった教育学部全体の雰囲気は完全に消え、教師と学生の間、学生間にもヨソヨソしいというかトゲトゲしい雰囲気があ

り愕然とした。なお、その間に、吉田禎吾先生が東大へ移られ、先輩達もどことなく淋し気に見えた。

昭和47年(1972年)4月に、丸山孝一氏が米国留学するのと交替に、東大から小野澤正喜氏が助手に着任して、少しずつ研究室にも「何か新しいことを」という気運が生じ、綾部恒雄先生と社会学の内藤莞爾先生の指導の下に研究会を発足させることになった。当時、私は博士課程3年生として在学し、米国の大学に提出する博士論文執筆とそのための調査に時間を取られ、余り大学に出て来ることはなかった。しかし、新しい研究会の発足は素晴らしいことに思われ、心躍るようであったのは、それをきっかけに、以前の活気が戻ってくるかもしれないと期待したからである。

当初、日本民族学会の支部的位置づけになることから、理事でいらした内藤先生から「九州民族学会」という名称にしてはどうかという御助言があったが、小野澤さんと私は、どうしても「人類学会」にすることを認めてもらえることを、内藤先生にお願いし、そのうえで理事会で報告して下さり現在に至っている。「九州民族学会」ではなく「九州人類学会」にこだわったのは、先に述べたように、九学会の九州大学支部のような研究会の活動が活潑であり、「民族学」の名称よりも広い学問領域を含むように思われたことである。いまひとつには、私自身のテキサス大学での留学体験に基づいて、いずれは人類学の名称が、文化人類学を中心として、人間の総合的研究のための総合科学となるであろうという予測と希望を持っていたからである。1968年から3年間学んだテキサス大学人類学部では、教授・助教授を合せて50人を超え、文化人類学を中心に、考古学、言語学、形質・生態人類学の講義や演習が行われ、理想的な教育研究活動のように思われたことによる。

その後、小野澤氏がタイへ留学し、その後任に、博士後期課程を「単位取得満期退学」をしたのを機に私が助手となり、次年度には片多順氏が私の後任の助手に就任した。2年間の留学を終えて小野澤氏が帰国、片多氏は福岡大学に就職、私は日本学術振興会の奨励研究員となり、また次々と大学院生が進学してきたし、福岡大学には松永・片多両氏、福岡教育大学に江渕一公氏、九州国際大学に上田将氏がいて、先輩・後輩が一体となって九州大学の綾部恒雄先生を中心に、文化人類学のひとつのセンターが福岡市周辺に形成された。私は、その間、研究会の報告者を捜し研究報告や講演の任を引受けてもらう交渉役に当たった。当時、一年間に10回、一回当たり2人の報告者、6月には総会を開き、できるだけ影響力の大きい「大物」を後援者としてお招きすることを目標にしていたので、年中、報告者捜しに努力しなければならなかった。しかし、それによって、九州だけでなく、中国地方にまで報告者捜しの網を広げることになり、多くの研究者の存在を知る良い機会を得た。米国留学から帰国した丸山孝一氏が広島大学に就職したことも、情報を得るうえで好都合であった。やがて鹿児島大学に高谷氏、大分大学に小馬氏が着任し、「九州人類学研究会」の「九州」は名実共に九州一円をカバーするようになった。

私自身は昭和51年(1976年)に佐賀大学に就職し、55年(1980年)に佐賀大学から九州芸術工科大学へ移動し、その後暫くは報告書の交渉役を勤めたが、10周年を期にその任を片多氏に替って戴いた。その間、西南学院大学に大谷裕文氏、九州大学教養部に清水展氏、福岡大学に浜本満氏が着任して、文化人類学を専門とする教育研究者の数が増えたが、それに伴って、報告内容が文化人類学中心となり、次第にそれ以外の分野の報告が少なくなっていく。毎月

の研究会の出席者が減少してきたのは、研究会の報告やコメントや議論が文化人類学中心となるのは、学生にとっては都合の良いことであっても、それ以外の領域の人々にとっては、何となく近寄りにくいものになっていったことによるものであったろう。そのことは止むを得ないことであったにしても、発足当初の総合科学的傾向は弱まったことになる。綾部恒雄先生、小野澤正喜氏が筑波大学へ移り、丸山孝一氏が広島大学から九州大学へ戻り、上田将・富士子夫妻がアフリカ調査から帰国後に新潟大学へ移った。宗教学、社会学、民法、解剖学それぞれに世代交替が生じて、九州人類学研究会創設に係った人々は次第に九州の地や現職を離れ、若い世代の人々が入ってきたり、大学院生が研究者となって、大きく顔触れが変化した。私自身はどのように都合をつけようとしても研究会に出席できない状態になった。平成5年(1993年)から10ヵ月の在外研究のために渡英したことをきっかけに、それ以来1度も研究会に出席しなくなり、やがて平成10年(1998年)にお茶の水女子大学へ移動し、現在形だけの会員となっている。

その間、清水展氏、大谷裕文氏、片山隆

裕氏、慶田勝彦氏達が丸山孝一氏を中心に九州人類学を支えて下さり、現在は関一敏氏、中西裕二氏また熊本から池田光穂氏が加わって、これらの方々が中心になり大変活潑な活動を続けて下さっていることに、創設に係った者の一人として感謝に耐えない。30周年を迎えることは、私自身が一人前の研究者となることを決意した日本学術振興会の奨励研究員に採用されて30年たったことを、私自身の研究歴において意味するので、個人的なことではあるが、一層感慨深い。

学園紛争のことも、それを機として大きく変化した大学の環境のことも、そして、おそらく教育に対して抱いていた理想も学園紛争で変えざるを得なかった当時の教員のことも、全く知らない会員が大半を占める九州人類学研究会の30周年会報に、こうした一文を寄せることになったのは、平成16年4月の法人化を機に、特に国立大学の教育研究活動が大きく変るであろうことを思わずにいられないからである。何がどのように変わろうとも、九州人類学研究会が今後とも存続することを心から願うものである。